

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考

―六朝・唐代の總集體例から考察する奈良末・平安朝漢詩集の特質―

半 谷 芳 文

前言

天曆年間（九四七～九五七）『千載佳句』を編撰した學儒大江維時が、天慶年間（九三八～九四七）東宮であった村上帝の命を受けて編纂した『日觀集』二十卷、その序文に次の一節がある。

昔者弘仁天長之世、有凌雲集文花秀麗集。

（昔 弘仁・天長の世、凌雲集・文花秀麗集有り。）

序文⁽¹⁾には「我が國では中國の詩文を尊重するが、自國の詩文は輕視する風潮がある。多くの詩賦が我が國でも作られてきたが、顧みられなかった。しかし弘仁（八一〇～八二四）・天長

（八二四～八三四）の御世は敕を奉じて自國の詩文を編纂し漢詩集として結實させた。」という。前掲の一節は、敕撰漢詩集が自國の漢詩文を尊重する起首であったと、二集を擧げて高く顯彰しているのである。注目したいのは、「弘仁・天長」と記しているのに、弘仁期編撰の「凌雲」・「文花（華）」の二集は擧げて、なぜか天長期の『經國集』を外している點である。維時の意圖は俄かに推定できない。しかしおそらく何らかの各集が帶びる特質の差異に根差した發言だったのではないか。いま改めて、三集それぞれの特質を捉える必要性を覺えるのである。

詩文總集の全體的な特質を把握しようとするとき、どのような考察をすればよいのか。さまざまな視點があろうが、いま二つ擧げよう。一つは、編撰者の詩賦觀である。撰者がどのよう

な抒情的特質をもつ作品を高く尊重していたのか。もう一つは、總集編纂上の體例——編纂するうえでの具體的な基準や書式——である。この體例は編撰者の詩賦觀に基づいて選定される、と考えてもよいだろう。これら二點は『文選』序を始め、唐人の編纂した總集の序文の中にもほぼ必ず何らかの記載があり、それらに多くを倣⁽²⁾って述作された敕撰『三漢詩集』及び『懷風藻』の場合も同様である。したがって體例を検討することは編撰者の詩賦觀の、最終的にはその總集の全體的な特質の理解に至るであろう。そこで本稿では、前記四集の體例の解明を通してそれぞれの特質と差異を明らかにしてゆきたい。

(一)

『凌雲集』⁽³⁾の體例から考察を始めよう。

得道不居上、失時不降下。無言存亡、一依爵次。

道を得るも上に居かず、時を失ふも下に降さず。存亡を言ふ無く、一^{もつぱら}爵次に依る。

『凌雲集』は官人詩人の榮達や落魄、存命や逝去に關わりなく、ただ（作者ごとにまとめた作品を）官位の高い順から配列している。

これは『凌雲集』序文に見える作品配列に關する記載である。

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考（半谷）

この體例——作品を個人別にまとめ、さらに官位の尊卑に従って配列する——に對して、從來どのように理解されてきたのか。

(一)、官位の上下による詩の配列方法は唐代詩集一般の方法ではなく、邦人の編撰者らが案出した編纂方法であらう。⁽⁴⁾

(二)、この編纂方法が採られているので、『凌雲集』は「官僚主義的」「公的」な性格をもつ集である。⁽⁵⁾

(三)、この編纂方法は『文華』・『經國』兩集に引き繼がれておらず、したがって『凌雲集』は「試作的」「嘗試的」な集である。⁽⁶⁾

以上のほぼ三點であらうが、こうした理解は果たして適切であらうか。ここでは體例に關わる(一)を中心に検討し、さらに(二)・(三)に對する見解も示してゆきたい。

『凌雲集』の官位の尊卑による作品配列を、邦人の撰者らが案出した編纂方法であらうと述べたのは、小島憲之氏であり、その後この見解への言及は管見に入っていない。だがこれは、こうした配列方法を『懷風藻』編纂時(七五・一成立)すでに理解していたこと。また『懷風藻』より約五十年、『凌雲集』(八一・四成立)より約百年前の初唐末(七〇・二頃)、この體例に一致する崔融編『珠英學士集』が編纂され、すでに渡來していた可能性が高いこと。これら二點に基づけば明らかな誤解であらう。

中國詩文論叢 第三十五集

『懷風藻』⁸⁾は、序文に續けて南朝梁の蕭統(五〇一—五三二)編『文選』に倣って目錄を記す。卷頭に「懷風藻目錄」と記した後、雙行小字で「略以時代相次、不以尊卑等級。」(略)時代を以て相次ぎ、尊卑を以て等級せず。(ほぼ時代順に並べて、官位や身分の上下によって配列しない)と注記する。⁹⁾これは『懷風藻』を編纂する際、撰者が個人別に作品をまとめ、さらに時代順に作品を配列する方法と官位の高低によって作品を配列する方法の、少なくとも二つの編纂基準を了解して、あえて前者を選択したことを示している。

『珠英學士集』(『珠英集』)五卷は、唐の則天武后朝に敕命を受けて類書『三教珠英』千三百卷を修撰した李嶠や張説など學士の詩を、崔融が『三教珠英』の成る大足元年(七〇一)十一月以後、¹⁰⁾ほとんど編撰したものであり、成書は長安二年(七〇二)ともいう。¹¹⁾宋代以降に散佚したが、二十世紀初頭、敦煌の莫高窟から卷四・五の寫本殘卷二種が発見された。散佚以前にこの集を家藏した南宋の晁公武は『郡齋讀書志』卷二十、『珠英學士集五卷』の條に、「右唐武后朝、詔武三思等修三教珠英一千三百卷。預修書者凡四十七人、崔融編集其所賦詩、各題爵里、以官班爲次。融爲之序。」(右 唐の武后朝、武三思等に詔して『三教珠英』一千三百卷を修せしむ。修書に預かる者凡そ四十七人、崔融 其の賦す所の詩を編集し、各々爵里を題し、官班を以て次と爲す。融 之が序を爲る。)と記述する。寫本殘卷に

見られる體例は、ほぼこの記載と同じである。¹²⁾

當集の體例の特徴はまさに「各題爵里、以官班爲次」にある。これは作品を個人別にまとめたうえで、官職の等級により高い順番から配列し、作品群冒頭の官銜(作者の肩書)に官職と籍貫(郷里)を記している體例を言う。なかでも「以官班爲次」という編纂方法が個人別編集を採ったうえで作品配列の基準とされた例は、それ以前の總集の中には見られなかった。これは初唐『珠英集』の編纂によって初めて採用されたものであり、當時としては極めて斬新な總集の體例であった。

一方、本邦には初唐に編纂された假稱『翰林學士集』(永徽三年(六五二)前後に成立か)の殘卷が遺存している。¹³⁾それは初唐の太宗時における君臣唱和詩を収めた總集であるが、各宴集ごとに複数の作者の作品がまとめられ、さらに官職の高い順から配列されている。確かにこれは『珠英集』の先蹤ではある。しかし各宴集ごとに作品をまとめる方針が編集の第一基準であり、「凌雲集」における體例の受容を検討するとき、『珠英集』と同等には扱えない。

こうして検討してみると『凌雲集』の體例は、それが『懷風藻』以来のこの體例理解に基づくものか、あるいは『珠英集』の編纂基準を直接倣ったものなのか、俄かに明言しがたいが、どちらの場合でも『珠英集』の影響を考慮しないでは成立しな

かった、と考えられる。

前者の場合にしても、成立後五十年を経て八世紀半ばの『懷風藻』編纂時までに、『珠英集』が渡来していたと見て不自然ではないだろう。『懷風藻』の撰者が個人別に作品を分け、さらに配列しようとした時、官位の尊卑による配列を編纂方法の一つとして學んだ、と推定できよう。それを『凌雲集』を編纂する際に『懷風藻』から學んだ、と理解するわけである。

たとえ『珠英集』からの受容がなかったとしても、「以官班爲次」という編纂基準は、邦人が獨自に案出したとはやはり認められないであろう。『懷風藻』成立より約百年前に編纂されたとされる前掲『翰林學士集』が、年代からみて渡来していたのはほぼ確實と考えられ、尊卑に依る配列自體はここから受容された、と考えても無理がないからである。

遅くとも寛平三年(八九一)以前に成る『日本國見在書目錄』「惣集家」には、「珠英學士集五(卷)」を著録している。⁽¹⁴⁾ 少なくとも編纂後は百十年を経た『凌雲集』編纂時(八一四)に舶来していたとは、充分に考えられるであろう。

ちなみに、この體例が最初の敕撰集の體例として決定された第一義的な理由は、體例そのものが、當時の詩賦と政治の關係を體現し、かつ國家經營の規範とも景仰する唐朝——この場合は初唐末——の總集の體例であつたからであろう。

(二)

『凌雲集』の體例の一つが唐代總集の享受によるとすれば、他の體例や他の集の場合はどうであろうか。

そもそも敕撰三漢詩集は、唐朝とその周邊國へ、共通する漢語を用いた文物によって、我が國が「文」を有する律令國家であることをマニフェストするための手段でもあつた。⁽¹⁵⁾ たとえ『凌雲集』が「嵯峨の個人的意志により編纂」されたとしても、⁽¹⁶⁾ 敕撰集として國家の編纂を経た以上、この志向性から離脱するものではない。いま『凌雲集』の體例の一つに唐代總集の受容を確認できた。編纂に臨んで渡来していた中國の文獻を精査することは當然の行爲であり、前述した『凌雲集』はその一例である。したがって敕撰三漢詩集、および『懷風藻』の體例上の特徴を把握するためには、まず六朝・唐代の詩文總集の體例を概括しておかなければならない。

始めに唐代に至るまでの總集の概要を見ておこう。先行研究⁽¹⁷⁾を参照すれば、まず六朝總集の體例の特徴は次のようになる。

- 歴代か斷代、あるいは當代かによって作品を收録する。
- 編纂時に生存する者の作品は採録しない(「不録存者」)。ただし南朝梁代の蕭統編『古今詩苑英華』の體例は、後述するように「收録存者」であつたと思われる。⁽¹⁸⁾

中國詩文論叢 第三十五集

○文體や類(似通う内容)によって作品を分類する(「分門編類」、類題別編集)。さらに時代順に配列する場合が多い(「以時代相次」、時代順配列)。

○作者の小傳などを付す場合もある。

こうした編纂基準が六朝總集の通例であつたらしい。六朝の總集でほとんど採用される「分門編類」とは、類書の編纂方法——讀者が内容分類に従つて調べ用典を容易にするための利便性を圖る——に影響されて誕生した、ともいう。

現存する六朝の總集は、南朝梁代の蕭統編『文選』と徐陵編『玉臺新詠』の二書だけであるが、失われた多くの總集は前述の體例を採り、作品を個人別に編纂した例はなかった、ともいう²⁰。であれば、「以人爲次」(個人別編集)は唐代總集の大きな特徴となる。

ただし現存『玉臺新詠』は作者ごとに作品を配列する。しかし同一詩人が二度以上收録される特異な形態を採つていて、唐代に編纂された「以人爲次」(個人別編集)の總集とは相違している。また「不録存者」の基準に合わない卷もある²¹。

要するに、六朝の總集の體例は、ほとんど「分門編類」であつたが、その中では唯一個人別に編集をしたものが『玉臺新詠』であり、それが今日まで傳わるのであろう。

唐代に入ると、六朝の成果を繼承し、さらに發展させた新た

な編集基準も加わり、唐代總集の諸體例が形成されてゆく⁽²²⁾。

○作品を個人別に編集する(「以人爲次」)。

○編纂時に生存する作者も採録する(「採録存者」)。

○官位の尊卑によって配列する(「以官班爲次」)。

○作品採録の期間を限定し、また作品を時間順に配列する(「以時代相次」)。

○各詩人ごとに序や詩評や小傳を加える。

○ある地域の詩人に限定して作品を採録する。

○作品としての完成度によって編纂する。

ただし、唐代總集が右の特徴をすべて備えているのではない。多くの場合、右の編纂方針から二つ、あるいはそれ以上を併せてそれぞれの體例としている。

(三)

次に前記六朝・唐代總集の全體的特徴を踏まえて、本朝『懷風藻』と敕撰三漢詩集が備える諸體例と對比させつつ、六朝・唐代の總集を調査してゆきたい。その對比によって本朝當該四集における受容と排除の實態などが、明らかになるだろう。

敕撰三漢詩集及び『懷風藻』の體例を検討する際の、以下の五つの觀點を用いて、中國の先行總集を検討したい。①「分門編類」か、「以人爲次」か。②「以官班爲次」、または「以時代相次」、あるいは他の配列方法か。③「不録存者」か、「採録

存者」か。④作者小傳・評語などを付すか。⑤作者名表記に位(散官)官職(職事官)・籍貫(出身地)などの記載はあるか。

唐代の詩文總集の總計は約二百五十種、そのなかで詩の總集は約百七十種あったというが、亡佚した集がはなはだ多い。その中から現存する集、さらに佚書であっても體例の推測可能な集から適宜選擇した。ただし、何らかの目的——例えば公私の宴・送別・唱和など——での一度限りの詩會の作品を集めている總集は除外した。それは一種の「分門編類」と考えられるからである。また檢討對象とした唐代總集の成立年代の下限は、敕撰三漢詩集が編纂された九世紀頃までとした。

初唐では六朝文化への憧憬⁽²⁴⁾があり、各總集の書名まで六朝期に倣い繼承する例が數多く見られる。その場合は體例も踏襲したと推定でき、したがって編纂時の作者の作品收録に關しては「不録存者」となる。

ところが『大唐新語』卷九「著述 第十九」のなかに、「今復有詩篇(編)十卷、與英華(蕭統編『古今詩苑英華』、あるいは僧慧淨編『續古今詩苑英華』)相似、起自梁代、迄於今朝、以類相從、多於慧靜(淨)所集、而不題撰集人名氏。」とあり、總集『詩篇』(佚名)の採詩範圍が「起自梁代、迄於今朝、」と記される。この記事は『詩編』に關して「與英華相似」とも述べてい

ることから、體例も類似すると判斷した。とすれば『古今詩苑英華』・『續古今詩苑英華』も編纂時に生存した作者の作品を採録していたのではないか。さらに「古今」を集名に冠する總集は通代を採詩範圍とする集と見なすことができ、したがってこれらの集は「採録存者」と推斷した⁽²⁵⁾。

作者名に爵里を冠するか否かの判斷も、現存する集が當初の形態通りなのかを考えると、確認が難しい。だがここでは現存の形態・表記を原則として尊重した。ただし現存しないものの中で、その體例が『文選』に倣うと推定できれば、『文選』の作者表記と同じくその記載がなかった、と推斷した。

ちなみに、南朝梁代の蕭統編『古今詩苑英華』には作者小傳が付記され、そこに時代・爵里・才行の記載があったという⁽²⁶⁾。したがってこの集に倣う後代の總集にも小傳の記載があった、と推定した。ただしその場合は、作者名の表記の中にも重ねて記述したとは考え難く、爵里の記載は「無」とした。

すでに散佚した總集に關する以下の見解は多くの推測を含むことを、あらかじめ斷っておきたい。

便宜上、初めに六朝の例を挙げておこう。

○『文選』三十卷・蕭統編・詩文、①分門編類②以時代相次
③不録④無⑤無。

○『古今詩苑英華』二十卷(十九卷『隋書經籍志』)亡佚・

中國詩文論叢 第三十五集

蕭統編・詩・①分門編類②以時代相次③採錄④有(付小傳)

⑤無。

初唐(六二八～七二一)

○『續古今詩苑英華』十卷(亡佚)・僧慧淨編・詩、①分門編類②以時代相次③採錄④有(付小傳)⑤無。

○『詩編』十卷(亡佚)・佚名編・詩、①分門編類②以時代相次③採錄④有⑤無。

○『古今類序詩苑』三十卷(亡佚)・劉孝孫編・詩、①分門編類②以時代相次③採錄④有⑤無。

○『古今詩類聚』七十九卷(亡佚)・郭瑜編・詩、①分門編類②以時代相次③採錄④有⑤無。

○『文館詞林』一千卷(殘卷)・許敬宗等編・詩文、①分門編類②以時代相次③採錄④無⑤無。

○『續文選』十三卷(十一卷)『玉海』卷五四(亡佚)・孟利貞編・詩文、①分門編類②以時代相次③不錄④無⑤無。

○『珠英學士集』(『珠英集』)五卷(殘卷)・崔融編・詩、①以人爲次②以官班爲次③採錄④無⑤有。

ちなみに、高宗・武后朝の詩文總集——『文館詞林』『芳林要覽』など——、および類書——『東殿新書』『玉藻瓊林』など——が大量に編撰された状況に關しては、賈晉華氏に論考がある。

盛唐(七二二～七六二)

○『文府』二十卷(亡佚)・徐賢等編・詩文、①分門編類②以時代相次③不錄④無⑤無。

○『文府』二十卷(亡佚)・徐安貞等編・詩文、①分門編類②以時代相次③不錄④無⑤無。

○『續文選』三十卷(亡佚)・卜長福編・詩文、①分門編類②以時代相次③不錄④無⑤無。

○『擬文選』三十卷(亡佚)・卜隱之編・詩文、①分門編類②以時代相次③不錄④無⑤無。

○『搜玉小集』一卷・佚名編・詩、①分門編類②以時代相次③不錄④無⑤無。

○『正聲集』三卷(亡佚)・孫季良編・詩、①以人爲次②不錄③不錄④不錄⑤不錄。

○『國秀集』三卷・芮挺章編・詩、①以人爲次②以時代相次③採錄④無⑤有(目錄のみ)。

○『丹陽集』一卷・殷璠編・詩、①以人爲次②地域限定③採錄④有(付評語)⑤一部有。

○『河嶽英靈集』二卷・殷璠編・詩、①以人爲次②以時代相次(登第年順?)③不錄④有(付評語)⑤無。

○『荊揚挺秀集』二卷(亡佚)・殷璠編・詩、①以人爲次②地域限定③採錄④有?『丹陽集』同様?⑤有?『丹陽集』同様?。

- 『玉臺後集』十卷（輯錄本）・李康成編・詩、①以人爲次②以時代相次③採錄④無⑤無。⁽⁴³⁾
- 『篋中集』一卷・元結編・詩、①以人爲次②？③採錄④無⑤無。⁽⁴⁴⁾

中唐（七六一～八三九）

- 『中興閒氣集』二卷・高仲武編・詩、①以人爲次②以時代相次③不錄④有（小傳・評語）⑤無。⁽⁴⁵⁾
- 『麗則集』五卷（亡佚）・李吉甫編・詩、①以人爲次②以時代相次③不錄④無⑤無。⁽⁴⁶⁾
- 『御覽詩』一卷・令狐楚編（奉敕撰）・詩、①以人爲次②以時代相次（はば卒年順）③採錄④無⑤無。⁽⁴⁷⁾
- 『南薰集』三卷（亡佚）・竇常編・詩、①分門編類②以時代相次③採錄④有（付贊語）⑤？。⁽⁴⁸⁾
- 『極玄集』一卷・姚合編・詩、①以人爲次②？③不錄④無⑤無。⁽⁴⁹⁾

便宜上、晩唐（八四〇～九〇七）からは現存する集を舉げておく。

- 『又玄集』三卷・韋莊編・詩、①以人爲次②？③採錄④無⑤無。⁽⁵⁰⁾

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考（半谷）

次に藤原佐世奉敕撰『日本國見在書目錄』に前述した諸書の有無を、孫孟『日本國見在書目錄詳考』に依りながら確認しておきたい。

「雜家」

- 『文府』十（卷）、○同十二（卷）、○同二（卷）
「文府」という書名を持つ書は、前掲の徐堅と徐安貞の他に、徐陵（五〇七～五八三）撰のものがある、という。『見在書目錄』著録の三書と三者編撰のそれぞれの書との關係は未詳。

「惣集家」

- 『文選三十卷』・『同六十卷』・その他、○『詩苑英（華）十卷』、
○『玉臺新詠十卷』
○『正聲集三卷』、○『續古今詩苑英華集十卷』、○
『文館詞林千卷』、○『珠英學士集五卷』、○『丹陽集一卷』、○『河嶽英靈集一卷』、○『荊揚挺秀集二卷』

を著録している。

さらに『見在書目錄』を見ると、これら以外にも渡來した詩文の總集と推測しうる集が幾つか見られるが、いまそれらの中から體例を推定できて、淳和朝までには渡來していた總集を舉げて置きたい。なお『見在書目錄』「惣集家」に見られる典籍・

中國詩文論叢 第三十五集

内容・體例・の不明な書の解明については今後の課題としたい、

- 『詞苑麗則集』二十卷(亡佚、序文は『文鏡秘府論』『南』に收録)・康顯貞(初唐)編・詩文、①分門編類②未詳③不録④不明⑤不明⁽⁵²⁾。

ちなみに、「見在書目録」には『注續古今詩苑英華集』二十卷・『續詩苑英華抄』一卷を著録するが、ともに該当する書も類似の書名をも唐代の文獻、その他には見出せない。これらは『續古今詩苑英華』に注を施し、また抄出した本邦の書と推斷でき、初唐に編纂された『續古今詩苑英華』が奈良末から平安初期に受容・鑑賞されていた、と理解してよい一證左となるう。

右に見てきた唐代の總集を本朝初期四漢詩集の體例檢討に即して考察した傾向を、ここに概括しておきたい。

- ①「分門編類」は六朝から唐代を通して、もっとも多く採用された體例である。他方、「以人爲次」は南朝梁代の徐陵編『玉臺新詠』を除けば、唐代に至って確認できる體例であり、現存する集に多く見られる。

- ②「以人爲次」、さらに「以官班爲次」を取る集は、初唐の『珠英學士集』がおそらく唯一の總集であろう。

ちなみに「以官班爲次」という編纂基準が多く見られるのは、何らかの詩宴や詩會での複数の参加者の作品を集め配列する場合であり、謂わば「分門編類」下での配列であ

る。⁽⁵³⁾ 奉敕撰『御覽詩』は「以官班爲次」を採用していない。

- ③「以時代相次」によって再配列する方法は、類題別・個人別編纂を問わず、どちらの編纂においても見られる。

- ④「採録存者」する方針は、確かに唐代に入ると多く採用されている。しかし至てこの體例を採るわけではなく、六朝以來の「不採存者」の集も見られる。

- ⑤傳記・品評などが付される例は、すでに六朝の蕭統編『古今詩苑英華』に見られるという。唐代に入っても『古今詩苑英華』の體例を倣うものや、南朝梁代の鍾嶸『詩品』の影響を受けた集には見られる。

- ⑥作者名表記は、姓・名のみの記載が通例であろう。位・職・籍貫(出身地)など爵里まで記述する集は、『珠英學士集』・『國秀集』(目錄のみ)・『丹陽集』である。ちなみに前掲の『翰林學士集』にも記載がある。

(四)

次に前記の六朝・唐代の總集體例の特徴と傾向から、本朝當該四集の體例を改めて對照し考察してゆこう。

『懷風藻』(七五一成立)は、個人別に編集(以人爲次)し、さらに時代順に配列(以時代相次)する。編纂時に生存した者の作品は收載していない、と考えられる。⁽⁵⁴⁾ 作者六十四人のうち九

人は、作者名表記に續き小傳を記述する。

「以人爲次」による編撰基準から検討を始めよう。この集の成立(七五一)當時、編纂者の周邊にあった書を見ると、總集では『文選』、そして年代からみても不自然ではない『古今詩苑英華』・『續古今詩苑英華』(ともに『見在書目録』に著録)、あるいは類書『藝文類聚』などが挙げられる。おそらく『玉臺新詠』も渡來していたであろうが、いずれにしてもほとんどが「分門編類」を採る集ばかりあった。ちなみにすでに渡來していたと考えられる『翰林學士集』なども謂わば「宴集」という類題による「分門編類」の總集と見ることができる。したがってまずその點で『懷風藻』の個人別編集という體例は際立ってくる。

「以人爲次」という體例を採る總集を検討してみると、まず六朝期には『玉臺新詠』(『見在書』に著録)が編撰されている。だがこの書は前述したとおり、『懷風藻』や唐代の總集の採る「以人爲次」(個人別編集)とは同一に扱えない性質を持っていた。次に、初唐末・盛唐以降になると個人別編集を採る集が現れてくる。初唐末の『珠英集』(『見在書』・盛唐の『正聲集』(『見在書』・『國秀集』・『丹陽集』(『見在書』・『河嶽英靈集』(『見在書』・序文は『文鏡秘府論』「南」收録)・『玉臺後集』(輯録本)、さらに年代は下がるが『中興閒氣集』や『御覽詩』などである。これらからの享受を検討すると、年代から判斷して

『珠英集』(七〇二)からの受容の可能性は十分に想定可能であろうが、『正聲集』——編纂者の孫翌は開元年間(七一三〜七四二)左拾遺・集賢院直學士(『舊唐書』卷一八九下)という——や『丹陽集』(七三五〜七四二年の間に成立)ではタイム・ラグを考慮すると疑問が生じ、『國秀集』(七五八〜七六四の間に成立)や『河嶽英靈集』(七五三以降の成立)などではその享受を想定することはできない。

しかしながら、やはりこの初唐末・盛唐(七二二〜七六二)以降の總集編撰の中で選擇されていく個人別編集の方式は、單に『珠英集』からの享受ばかりではなく、すでに何らかの形で『懷風藻』編纂時(七五一)にも傳播していた、と捉えられないだろうか。その受容のもとに、序文に自ら「余撰此文意者、爲將不忘先哲遺風。」(餘 此の文を撰ぶ意は、將に先哲の遺風を忘れざらんとせんが爲なり。)と記述する編纂意圖によって、この體例が選擇されたのではないか、という臆測から離れられないのである。⁽⁵⁵⁾

「以人爲次」に編集し、さらに「以時代相次」と配列する集には、盛唐の『國秀集』・『河嶽英靈集』(登第順?)・『玉臺後集』(輯録本)、『中興閒氣集』や『御覽詩』が挙げられる。『懷風藻』編纂時は、中唐(七六二〜八三九)目前であるが、成立年代からみればこれらの集との受容關係は認められない。ただし再說するが、「以時代相次」という編纂方法は六朝・唐代を通

中國詩文論叢 第二十五集

じて類題別・個人別編集を問わず多くの集で採用されている。前記の通り奈良末・平安朝に廣く受容された『文選』もこの體例を採る。さらに「先哲の遺風」を追想するという編纂意圖に従えば、この體例は自ずと採用されたのであろう。

「不録存者」は確かに六朝總集の一般的特徴であり、唐代に入っても見られた編撰基準である。だがこの體例も前掲の編纂意圖に因んだ選擇、と理解すべきであろう。

作者小傳は、南朝梁代の蕭統編『古今詩苑英華』、初唐の僧慧淨編『續古今詩苑英華』などに見られたようであり、後者は注を施した書や抄本も『見在書目錄』には著録されていて、流布していた可能性が高い。この二書からの影響は從來指摘されなかったが、今後充分に検討されてよいだろう。ちなみに個人別に編集し作者ごとに品題を付す體例は、盛唐の殷璠編『河嶽英靈集』・『丹陽集』、中唐の貞元年間(七八五―八〇四)の始めに編撰された『中興閒氣集』などに見られる。この品題を小傳に變えれば、『懷風藻』に近い體例となる。また作品の品題ではなく、作者の小傳を記述した主な理由もやはり前記の編纂理由に在る、と考えられる。

序文の末尾に、「具題姓名、并顯爵里、冠于篇首」(具さに姓名を題し、并せて爵里を顯はし、篇首に冠す。)との記載があるが、例えば「從三位中納言大神朝臣高市麻呂」のように位・職・姓・名は記述しても、「通事舍人吳興沈佺期」(『珠英集』卷四)のよ

うに籍貫(郷里)の記載はない。これとほぼ似た作者名表記を持つのが、現存する集では盛唐の『丹陽集』・『國秀集』(目錄)である。だが官銜の記載は六朝の蕭統編『古今詩苑英華』や初唐の僧慧淨編『續古今詩苑詠華』にも見られたと言われている。何よりも唐太宗と弘文館學士の許敬宗・褚遂良等の奉和詩ごとに編撰した『翰林學士集』(六五二前後に成立)に記載があつて、確認できる。我が國に遺存するこの書からの影響は、後述するように敕撰三漢詩集期の作者名表記が『翰林學士集』とほぼ同じ書式を採るという指摘から推定すると、大いに可能性があるだろう。

『懷風藻』(七五一成立)の各體例を検討すると、何れも六朝及び初唐に跨る特徴を示している。『懷風藻』の韻律(句法・押韻・平仄)は初唐の傾向も含むが、全體としては六朝に近い傾向、と前稿に指摘した。⁽⁵⁶⁾だが體例上の特徴は、六朝から唐代までの傾向を示しているが、より唐代に傾くものではなからうか。

『凌雲集』(八一四成立)は、個人別に編集し、さらに官位の尊卑に依る配列方式を取る。編纂時に生存する者の作品も收録し、作者の小傳などは付さない。官銜(作者名表記)に位階・職名を記す。これらはすべて初唐末『珠英學士集』の體例に一致している。⁽⁵⁷⁾『見在書』にも著録される『珠英集』の體例を攝取した、と捉えるのが妥當であろう。

當集の諸體例は、舶來していた六朝・唐代總集の編纂方法をよく検討したうえで採用していることがわかる。序文「無言存亡、一依爵次」の「存亡」を言ふ無し」とは、採詩の基準として、編纂時に生存する作者を採録する方式としない方式の兩者があること、つまり六朝期の總集一般の「不録存者」と、唐代に入ってから増加し始めた「採録存者」との二つの基準を理解していて、後者を採用したことを示している。律令國家の規範と仰ぐ唐の文物に典據を求め、『珠英學士集』——成立は盛唐目前——こそ、初めて編纂する敕撰漢詩集の體例に相應しい、と論議し決定したのである。ちなみにこれは敕撰三漢詩集期の韻律傾向が、今體詩完成目前の初唐後半に一致する狀況と變わらない。⁵⁸

ちなみに、『懷風藻』編纂時に比べれば唐人選唐詩の幾つかが渡來していたとしても、やはり當時の詩・詩文總集のほとんどが、「分門編類」を採る書であったと考えられる。その中で誕生した、個人別編集を採り、さらに平城・嵯峨帝を卷頭に置いて官位順に作品を配列する『凌雲集』は、『珠英集』が誕生した時のように斬新な印象を與えて、「文」の達成を燦然と示していたであろう。

『文華秀麗集』（八一八成立）は序文末尾に「竝皆以類題敘、取其易閱。」（竝びに皆類を以て題敘し、其の閱し易きを取る。）

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考（半谷）

と、體例への記載があり、「分門編類」を採用、と明記する。編纂時に生存する者の作品も採録するが、作者小傳などは付さない。作者名表記は唐風に三文字（姓二字と名一字）に改めて表記し、爵里の記載はない。ただし、おそらく作成されたと思われる目録が失われているため、そこでの作者名表記は確認できない。

「分門編類」は六朝・唐代の總集に最も多い體例である。しかも當集の場合、この體例の淵源である『文選』の類題だけでなく、唐代の影響を受けた類題まで加えていて、單に『文選』のみを模倣するわけではなかった。⁵⁹

これらの特徴から、當集が『凌雲集』と同様に唐代總集の體例に鋭敏に反應して編纂されていたことがわかる。

もっとも注目すべき點は、「分門編類」によって編集したのちの配列、つまり同詩題下での再配列の基準である。六朝・唐代を通じて多く採用された時代別配列ではなく、ここでは「以官班爲次」という基準を採っている點である。いま二例を擧げてみよう。まず部類「樂府」下の詩題「王昭君」五篇の作者の配列を、『文華秀麗集』編纂時における位・職から見ると、

嵯峨天皇

良岑安世——從四位下・右大辨・左衛門督・近江守（桓武天皇皇子）

菅原清公——從五位上・式部少輔・阿波守

中國詩文論叢 第三十五集

朝野鹿取―從五位上・内藏頭・因幡介

藤原是雄―從五位下・左兵衛左

次に部類「雜詠」下の詩題「河陽十詠」・「奉和河陽十詠」の作者配列を見ると

嵯峨天皇

藤原冬嗣、正三位・大納言・左近衛大將・陸奥出羽按察使

良岑安世、從四位下・右大辨・左衛門督・近江守(桓武天

皇皇子)

仲雄王、從五位下・大舍人頭・信濃守

朝野鹿取、從五位上・内藏頭・因幡介

滋野貞主、從六位下・大内記

となっている。

後者では仲雄王が位階よりも上位に位置づけられている。これが當集だけならば當集の編撰や序文を述作した點が考慮されるの順列か、とも考えられる。しかし前『凌雲集』でも位階よりも上に置かれている。前集でも編撰等に關わったのであろうか、とも推定するが、それを裏付ける資料を未だ讀み取ることができない。おそらくこの人物は當集編纂に預かった以外にも當時何らかの詩賦に關わる評價があつて、位階よりも高い順番に置かれていたのであろうか。現段階ではわからない。

だが全體として見れば、これらの作者配列は官位の尊卑順であるとして理解できよう。つまり、當集は「分門編類」を第一基準

とし、再配列には「以官班爲次」を採用している。これは「以人爲次」の『凌雲集』と第一の編纂基準では異なっているが、再配列する際に「以官班爲次」を採用した點では、『凌雲集』を繼承もしているのである。

當集に見られる「分門編類、再以官班爲次」という體例の組み合わせは、前掲の唐代總集の中には見られなかった。ただし前述したように詩宴や詩會での複数の参加者の作品を集め配列した總集には採られていた體例と言われている。では當集においても再配列する際に、そうした總集の中の渡來していた集、例えば『翰林學士集』から攝取したと考えるべきであろうか。確かに至くは否定しえないが、四年前に初めて編纂された『凌雲集』が同じ敕撰集ということから第一に意識されていたであろう。當集の序文劈頭が『凌雲集』編纂から説き起こしている點はその證である。

では奉敕撰であり個人別編集を採る海彼の『御覽詩』でも採用しなかったこの「以官班爲次」という體例が、なぜ我が國の敕撰三漢詩集では編纂基準とされたのか。今その理由の一つとして擧げて置きたいのは、作者に天皇・皇族を含む點である。二者の具體的な相違を検討すると、『御覽詩』では皇帝など天子眷屬は含まれないが、本朝では作者に天皇・皇族を含むのである。當時の貴族・官人社會やそこにおける天皇のあり方、さらに後述する漢詩文の放つ機能を意識し考慮して、相應しい體

例を模索すれば、「以官班爲次」の體例は極めて必然的な選擇であった、と考えられよう。

『經國集』（八二七成立）は、序文に「人以爵分、文以類聚」（人は爵を以て分かち、文は類を以て聚む）とあり、作者ごとに分けられた作品が官位の尊卑により配列され、内容に応じて分類するという。しかし實際の編集状況を見ると、類聚して作品を分け、同題下の作品群を官位順に再配列している。編纂時の生存者の作品も収録する。作者小傳などは記述していない。つまり『經國集』のここまでの體例は『文華秀麗集』を繼承しているのである。

次に作者名表記を見ると、目録では位階・官を姓名の上に冠するが、巻中では唐風にした姓・名の三文字表記のみを記す。これは前者が『凌雲集』、後者が『文華秀麗集』を繼承すると捉えられよう。ただし『經國集』各巻目録では、同一詩人を再度表記する場合、官銜の記載はなく巻中と同じく唐風三文字の姓・名を記している。

ちなみに、『文華秀麗集』は目録が散逸しているが、『文華』の體例を踏襲する『經國集』には目録に位階・官職の記載が見られる。したがって『文華秀麗集』でも目録には位階と官職の記載があった、と推定もできるが、『凌雲集』では巻中・目録ともに位階・官職を記し、『經國集』が『凌雲集』を繼承して

もいる点から『文華秀麗集』の目録の記載を考えれば、巻中同様に姓・名の三文字のみとも推定できる。どちらとも決しがたい。

(五)

ここで前掲四集の官銜、つまり作者名に冠する肩書について一考を付しておきたい。

大納言正三位紀朝臣麻呂（『懷風藻』目録）

正三位大納言紀朝臣麻呂（『懷風藻』）

左兵衛督從四位下兼行但馬守良岑朝臣安世

（『凌雲集』目録）

左兵衛督從四位下兼行但馬守良岑朝臣安世（『凌雲集』）

朝鹿取（『文華秀麗集』、目録缺）

從四位上行大學頭兼文章博士播磨權守菅原朝臣清公

（『經國集』目録）

菅清公（『經國集』）

右は四集の官銜である。前述したように『文華』の目録にも位階と官職の記載があったとすれば、四集の官銜は「位階・官職（官職・位階）」を記述している点で共通している。⁽⁸²⁾さらに關と「以人爲次」（個人別編集の『懷風』・『凌雲』では目録・巻中ともに官銜を冠するのに對し、「分門編類」（類題別編集）の『文華』・『經國』では官銜の記載は目録のみ、作品題下には

中國詩文論叢 第三十五集

唐風の姓・名三文字(姓一字と名二字)のみを記述する。

『懷風藻』以前に誕生した總集の有無を検討すると、川口久雄「修訂詩家書目」⁶³⁾にも著録する總集が見えない。これに従えば『懷風藻』が最初の總集となる。つまりこの官銜の記載はわが國最初の總集『懷風藻』(七五一成立)に始まり、それ以後も繼承されているのであろう。

現存の唐代の詩賦總集の作者名表記を確かめると、姓・名に冠して品階、または官職の記載があるのは、初唐末の崔融編『珠英學士集』、盛唐の芮挺章編『國秀集』(目錄にのみ記載、七六〇年ごろ成立)、同殷璠編『丹陽集』であらうか。あるいは蕭統編『古今詩苑英華』とその體例を襲う總集には見られたかもしれない。しかし全體を見れば唐代の總集では、位階・官職を、共に、あるいは一方を姓・名に冠する作者名表記は少なかつたであらう。ちなみに奉敕撰『御覽詩』は「姓氏總目」・「目錄」も含めて官銜の記載がない。いったい詩集の作者名表記において姓・名に冠して位階と官職を明記するこの我が國の體例は、何を意味しているのであろうか。

作者と漢詩文と「位階・官職」の三者を結び付けるもの、それはおそらく本邦における所謂「文章經國」的文藝觀であらう。日本の古代社會において漢字は支配者の何らかの意向を、實政治や外交において常に言明する機能を果たしていた。さらに詩賦は漢字における「文」の精華である。母語でない漢字・漢文

を理解して述作する、そこには政治を擔う官人としての不可缺で高度な技術が、そして詩賦、およびその述作には「文」の達成が顯現される。それらが官人、ひいては國家の權威を誇示する、という認識が存在していたであらう。「漢字の機能」に基付く「文章經國」的詩賦觀から、この作者名表記に關する體例が誕生したのではないであらうか。

なお、作者名表記において官銜ある場合と中國風姓・名三文字の表記の體例上の相異がどのような意味を持つのかは後述したい。

(六)

本朝初期四總集を六朝・唐代總集の體例に比較してその特徴を理解した。ここでは平安朝の總集の體例のなかに置いて、各集の全體的特質をさらに把握しよう。

まず、『經國集』の後に續く平安朝の總集ではどのような體例があり、その傾向はどのようなものであろうか。前記四集の體例を検討した觀點を通して検討してみよう。平安朝に總集がどれほど編纂されたのか。難しい推定であるが、前掲の川口「修訂詩家書目」には六十種の總集を擧げる。ただし佚書もさくばる多い。その中から現存・殘卷、あるいは佚書であっても體例を知る手がかりのあるものを選出した。

○『日觀集』二十卷(亡佚・序文が『朝野群載』卷一に收録・大江維時等編・詩、①分門編類②以時代相次③不録④?⑤?)⁶⁴⁾

○『扶桑集』十六卷(殘卷二卷)・紀齊名編・詩、①分門編類②?③?④無⑤無(目録缺・卷中に無し、『經國集』と同様に目録には記載有りか)。⁶⁵⁾

○『本朝麗藻』上下二卷(上卷のみ殘闕)・高階積善編?・詩、①分門編類②以官班爲次③採録④無⑤姓名は三文字表記が原則、中には職名記載の例も有り。目録缺。⁶⁶⁾

○『本朝文粹』十四卷・藤原明衡編・詩文、①分門編類②?③不録④無⑤姓名は三文字表記が原則。中には職名記載の例も有り。⁶⁷⁾

○『中右記部類紙背漢詩集』①分門編類②以官班爲次③?④無⑤有。⁶⁸⁾

○『本朝無題詩』十卷(流布本)・佚名編・詩、①分門編類②?③採録④無⑤唐風三文字表記にせず、姓・名の表記。⁶⁹⁾

次に佚書でも體例を推測しうる例を擧げる。

○『集韻律詩』(亡佚)菅原是善編・詩、①分門編類、以下不明。⁷⁰⁾

○『韻花集』(亡佚)・藤原宗忠編・詩、①分門編類、以下不明。⁷¹⁾

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考(半谷)

これら平安朝總集の體例を見ると、いくつかの特徴がわかる。編纂時の存者の採録・不録に關しては唐代と同じく兩様見られる。作者名表記には、『文選』や唐代總集の通例に反し、『懷風藻』以降、官職・位階の記載があるのが一般的である。だが何より注目すべき特徴は、平安朝では『文華秀麗集』以後、編集の第一基準は「分門編類」のみであった點である。言い換えれば「分門編類」を選択し續けた、とも言つてよい。確かに唐代の總集でもこの編纂方法を探る總集がもっとも多かった。しかし唐代では現存する唐人選唐詩に多く見られるように「以人爲次」の總集も編纂されていた。この點から見ればこれは明らかに本朝の總集編纂上の大きな特色である。さらに本朝「分門編類」の類題を検討すると、淵源である『文選』の單なる模倣を脱却し、新たな部類をも設立して加えていくことがわかる。

(七)

ところで總集編纂とはどのような過程を経るのか、確認しておきたい。

そもそも總集が編纂されるためには、採録對象の詩賦が残されていなくてはならない。對象の詩賦とは、すでに編纂された別集、總集に收載された作品や傳承・流布する作品であり、これらの蓄積があつてこそ新たな總集の編纂が可能になる。⁷²⁾ 本邦においても同様であろう。

中國詩文論叢 第三十五集

『群書類從』卷百三十四『雜言奉和』一卷には、三つの詩會の詩卷が收録されている。卷頭の嵯峨天皇作に奉和した五首⁽⁷⁶⁾を收録する詩卷に注目したい。後藤昭雄氏は「ある一つの場における詩作をそのまま記録した獨立の詩卷（の斷簡）なのである。」と指摘するが、卓見であろう。つまりこれこそ、新たな總集編纂の際に採録の對象となつた作品集の實例である。この千二百年前の詩卷は、制作直後の書式を傳えて貴重なばかりでなく、當時の總集編纂に際し、多くの採詩對象の詩卷の存在を確信させるという意味でも、實に貴重なのである。

付言すれば、こうした總集・別集の殘され方は、後に總集の編纂が豫想される場合と、そうでないのとでは、おそらく相違していただであらう。具體的に言えば、最初の敕撰集『凌雲集』以前とそれ以後では、殘された詩卷の數量に差が生じていたのではないか。『文華秀麗集』が約四年間で前集のほぼ二倍に當たる作品を收載できたのは、それを示す一例であらう。

次に、編纂はさまざまな過程を経るであらうが、その一例を實例に即して推定し、留意すべき點を舉げておきたい。

『懷風藻』では、「以時代爲次」と「以官班爲次」の中から前者が選擇された、と述べた。これは配列に關する體例の選擇の中で、中國の先行する體例を參照・考慮したことを具體的に示している。作品選定や表記に至るまで同様だったに違いない。

敕撰三漢詩集に至ると、さらに考慮すべき條件が加わる。そ

れは編撰者名が複数明記されている、つまり編撰者が一人ではなかつた點である。六朝・唐代でも實際には序文に記された編撰者以外に編纂に携わる者が存在した場合もあるが、敕撰三漢詩集のように序文に複数の編撰者の名が記述された例を管見では見出せなかつた。これと併せて、三集各序文に見られる再三論議したという記載を考えれば、それは總集編纂に對する謙辭も含まれようが、文字通り重ねて複数の編撰者が検討した實態をも示していよう。したがって、成書した總集は、その時點で望みうる最良の形態と狀態、そして當時の詩賦觀が示されている、と捉えるべきなのである。

(八)

六朝・唐代、さらに平安朝の總集體例の特徴の中で検討した敕撰三漢詩集および『懷風藻』の體例の示すものは、いったい何であらうか。

平安朝の總集の中に『懷風藻』から『經國集』までを俯瞰してみると、四集は六朝・唐代の總集の體例を受容し、最終的には新たな部類も加える本朝「分門編類」（類題別編集）、さらに六朝・唐代におそらく前例のない「分門編類、再以官班爲次」という總集體例への過程とその確立であつた。

詩賦觀があつて體例が選擇され、體例は詩賦觀の表れである。確かに多大なる六朝・唐代の影響の中にあつたが、我が國初期

四總集の體例はそれぞれの詩賦觀があつてこそはじめて選定され、單なる模倣ではなかつた。

「以人爲次」(個人別編集)を採用したのは、『懷風藻』・『凌雲集』である。「余撰此文意者、爲將不忘先哲遺風。」という編集意圖や、一部に作者小傳を付記した體例からもわかるように、作品の抒情から長逝者の人品を懷古・思慕しようとした『懷風藻』、魏の文帝曹丕の「文章者經國之大業」を引いて詩賦は律令政治下の官人の高度な技倆を示し、且つ教化效用的作用があるゆゑに政治に資すと唱えた敕撰の『凌雲集』、ともに抒情を成り立たしめる作者を強く意識する詩賦觀である。したがつて必然的に個人別編集の方式が選擇された。さらに前者では「以時代相次」(時代順配列)、後者では「以官班爲次」(官位の尊卑に依る配列)によつて配列したが、やはりそれぞれの詩賦觀に即してゐる矛盾がない。また、兩集ともに目錄と卷中の作品題下の作者名に官職・位階を冠する體例は、個々の作者の官人としての來歴や技倆、そして品格を意識させる働きがあり、これも詩賦觀に即してゐる同様である。

「分門編類」を採用したのは、『文華秀麗集』・『經國集』である。「分門編類」(類題別編集)は六朝・唐代、奈良・平安朝を通じて鑑賞された『文選』編纂上の第一基準であつた。その序文の體例に關する記載を見ると、「詩賦體既不一、又以類分。類分之中、各以時代相次。」(詩賦の體 既に「ならず、又類

を以て分かつ。類もて分かつの中は、各の時代を以て相次ぐ。)とある。つまり詩賦の詠作内容は同じではないので、(鑑賞しやすいように)類別し、各分類の中の作品は、時代順に並べた、という。『文華』序文にも、「竝皆以類題敘、取其易閱。」(竝皆類を以て題敘し、其の閱し易きを取る)と記述し、『文選』よりさらに明確に鑑賞の利便を圖るために類題別に編集した、と述べる。これはこの總集の編纂が、詩賦においてまず享受されるべきは、詠作内容そのもの、作品の抒情、言い換えれば、文藝的な「美」こそが第一に尊重され、また鑑賞されるべきであるという詩賦觀に基づいてゐることを明示してゐよう。

この詩賦觀の特徴を、さらに體例からも確かめてみたい。作者名表記における位階と官職の記載は、詩賦に「文章經國」的機能を主張する詩賦觀や、作品を成り立たしめる作者個人をより意識する詩賦觀の表れ、と前に述べた。これに對照すれば、官銜の記載がなく唐風に三文字にした姓・名のみ表記は、詩賦の經國的功能を背後に退けて、作者個人よりも作品の文藝性を前面に捉えようとする詩賦觀があつてこそはじめて採られた體例、と考えられないだらうか。

『凌雲集』の個人別編集から『文華秀麗集』の類題別編集への轉換は、詩賦觀の變質を示している。これは、すでに三木雅博氏が「平安朝漢文學史の上で畫期的な選擇」と的確に指摘するとおり、まことに儒家的な詩賦觀から抒情そのものに價值を

中國詩文論叢 第二十五集

見出す詩賦觀への大きな轉換だったのである。

ただし、その轉換が矛盾・相克なくすっきりと爲されているわけではない。再配列には「以官班爲次」を採用し、やはり儒教的な詩賦觀が伏流している。しかし「分門編類」と「以官班爲次」が表裏するこの二面性のある體例こそ、抒情の唯美性を第一とする詩賦觀を有するにも関わらず、國家の編纂を経る敕撰集という性格ゆえに詩賦は經國性を有するという詩賦觀、さらに作者に天皇・皇族を含むという事情をも考慮して、編纂者が論議の末に採擇した本朝敕撰漢詩集の獨自の體例であった。

『文華』の目録は散佚したため確認できないが、少なくとも『經國集』の目録と卷中における相違した性格を持つ二つの作者名表記は、まさに彼らの詩賦觀の持つ二面性が顯在化した體例であったのである。確かにこの詩賦觀は二面性を持つ。しかしその強弱は體例から見れば明瞭である。すなわち「分門編類」を第一基準、つまり詩賦の抒情の「唯美性」を第一に尊重しているのであり、その点においてこそ本朝漢詩史上の大きな意味があった。それは、この體例の嚆矢となった『文華秀麗集』において、類題「艷情」を立て儒家的文藝觀や『文選』では否定されていた抒情の作品を類聚し、「四季と戀との世界を愛惜する本朝の人々の詩的感性」を詠じた作品に、しかるべき位相を與えたことから諒解できよう。

一方、もしも『凌雲集』に對し、文藝性を第一としない體例

を採って後續の二集に及ばないなどと論評するならば、少なくとも八世紀から九世紀初頭にかけて詩賦が實際に制作されていた場が、ほとんど公的性格を有する場であったこと、詩賦への認識もほぼ儒家の文藝觀に沿うものであり、さらに平安初頭の漢語による文物編纂の意圖など、それらすべてを無視する、極めて今日的な視點からのみ捉える不當な評價ではないのか。教化効用性があるからこそ實社會に存在する意義があるという詩賦觀は、規範とする唐朝の政治理念である儒家の文藝觀として正統性を有し、唐朝敕撰の歴史書の「文苑傳」「文學傳」の序などに標榜され、また六朝・唐代でも詩賦の抒情批判において、もっとも典據となり根幹ともなった詩賦觀であった。再述するが、『凌雲集』は、國家が漢詩文の總集を編纂するにあたって當然掲揚すべき正統的な詩賦觀を唱え、それに整合する體例「以人爲次、再以官班爲次」を採擇した、まさに嵯峨朝の敕撰にふさわしい漢詩集であったのである。

ちなみに、『凌雲集』から『文華秀麗集』へ轉換、「以人爲次」から「分門編類」へ至る約四年間には、何が起きていたのか。それは律令國家における實務的要請や、『凌雲』・『經國』兩序に端的に示される詩賦述作を保障する「文章經國」的文藝觀のもとで、漢詩文が繰返し制作された結果である。これを詩人的内面に即して言い換えれば、「彼等(官人詩人)は詩賦本來の意義や本質を、その創作行爲のもつ意味も含めて、儒家的政教的

文藝觀の桎梏から解き放たれたところに見出し始めていた⁽⁷⁹⁾、と概ね理解してよいだろう。

『經國集』編撰の意義は大きく、從來あまりにも關心が拂われていなかった。當集は類題別編集を探り、さらに官位の尊卑によって配列する。これは『文華秀麗集』の體例に同じであり、官位の尊卑に依る配列は『凌雲集』の繼承でもある。だがこれを單なる前一集の繼承と見ては、この體例選擇の意義、ひいては平安朝總集における「分門編類、再以官班爲次」の體例選擇の意味を見失うであろう。

『經國集』は序文冒頭で『凌雲集』序文の「文章經國」的文藝觀と同質の詩賦觀——儒家的文藝觀であり、初唐の敕撰の一連の歴史書の「文苑傳」「文學傳」序などに記述されている詩賦觀の一つであり、教化效用性を主張する——を、再三力説する。その詩賦觀に従えば、當然、本來選擇すべき編纂の第一基準は「以人爲次」（個人別編集）でなければならぬ。しかし編撰者らが採擇したのは「分門編類」（類題別編集）である。これは紛れもなく序文の詩賦觀と實際の體例の背理を表している。しかもそれは、再三の論議を重ね経ていること、また『文華』序文にはなかったが、この序には「分門編類」と「以官班爲次」という體例が、「人以爵分、文以類聚」と雙方とも明記されていること、それから判斷すれば、編撰者らに明らかに理解されていたであろう。この矛盾を自覺する中で、序文に「文章經國」

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考（半谷）

的文藝觀を再度より強く主張しなければならなかった何らかの理由よりも、文藝性を第一とする詩賦觀を優先し、體例によってそれを顯示した。つまり詩賦の經國性よりも文藝性を重視する詩賦觀を樹立したのである。ちなみに當集序文の中で『文華』所收の作品を「不刊之書」（一字も修正するところのない素晴らしい詩賦）と絶賛・賞揚して、作品の抒情そのものを第一に尊重する姿勢を示していることから、彼らの文藝性を第一にする詩賦觀が窺われよう。

この採擇・決定こそ以降の平安朝漢詩とその述作、および總集編纂において、詩賦抒情の唯美性の尊重とそれに整合する體例の確立という結果に繋がっている。『經國集』がこの體例を採擇し決定した意義は、最初に轉換した『文華秀麗集』に勝るとも決して劣るものではなかったのである。

『日觀集』序文に「弘仁・天長之世」に對應して「凌雲集・文花（華）秀麗集」を挙げた大江惟時の意圖は、この二集の擧例が平安朝總集の體例を確立した『經國集』を示すことにほぼ等しい、というあたりにあったのかもしれない。

【注】

- (1) 『朝野群載』卷一「文筆上」（國史大系本）所收。
夫貴遠賤近、是俗人之常情。閉聰掩明、非賢哲之雅操。・・

中國詩文論叢 第三十五集

我朝遙尋漢家之謠詠、不事日域之文章。草稿滋生、塵埃空積。寔可重心咨歎者也。昔者弘仁天長之世、有凌雲集文花秀麗集。其後百餘年間、絕而不續。

夫れ遠きを貴び近きを賤しむは、是れ俗人の常の情なり。

聰を閉ぢ明を掩ふは、賢哲の雅操に非ず。・我が朝遙かに漢家の謠詠を尋ぬるも、日域の文章を事とせず。草稿滋生し、塵埃空積せり。寔に心を重くし咨歎すべき者なり。昔弘仁・天長の世、凌雲集・文花秀麗集有り。其の後百餘年の間、絶えて續かず。

『千載佳句』に『文華秀麗集』の類題名「艷情」を用いて一部類を立て作品を収載しているが、これは大江維時が敕撰三漢詩集を受容し繼承していた明證である。

- (2) 敕撰三漢詩集序が唐人選唐詩序に倣っていることは、すでに拙稿「文華秀麗集の位相」(『中國詩文論叢』第十七集、一九九八年)で一部分指摘した。敕撰三漢詩集の各序文の内容結構や語句措辭が唐人選唐詩序、および初唐編纂の正史「文學傳」「文苑傳」序などの享受のもとに作成されたことは次稿に詳述したい。

- (3) 『凌雲集』は小島憲之『國風暗黒時代の文學』中(中)(塙書房、一九七九年)、『文華秀麗集』は日本古典文學大系岩波書店、一九六四年)、『經國集』は『國風暗黒時代の文學』中(下)I(塙書房、一九八五年)の本文に依る。

- (4) 小島憲之『國風暗黒時代の文學』中(中)(塙書房、一九七九年)「成立・採詩などの問題をめぐって」一二四〇頁。

- (5) 注4同書二三九頁。

- (6) 小島憲之氏は『文華秀麗集』『經國集』がこの先行詩集『凌雲集』とは違つて、内容分類によつて詩を配列した態度は、やはり文學編輯をよく理解してゐた證據になる。何れにしても『凌雲集』は次に生れるべき詩集の、先行詩集としての嘗試的な詩集と云ふべきである」という(注4同書一二七三頁)。瀧川幸司氏は「敕撰集の編纂をめぐって」(『日本古代の「漢」と「和」』所收、勉誠出版、二〇一五年)の中で、さらに別の理由「『凌雲集』編纂が嵯峨帝の個人的意志に依る、收録詩数が「小さい」、正史に記載がない」とから、小島氏の見解を支持する。ともに疑問があるため次稿で詳述したい。

- (7) 注4同書一二四〇・一二七三頁。

- (8) 『懷風藻』は日本古典文學大系(岩波書店、一九六四年)の本文に依る。

- (9) 雙行小字注は編撰者の自注と考える。

- (10) 傳璇琮『唐人選唐詩新編』(陝西人民教育出版社、一九九六年、以下この書は書名を「傳璇琮書」と略稱する)参照。ただし同書所收の『珠英集』は徐俊の編撰。また徐俊『敦煌詩集殘卷輯考』(中華書局、二〇〇〇年)、盧燕新『唐人編選詩文總集研究』(中國人民大學出版社、二〇一四年、以下この書は書名を「盧燕新書」と略稱する)第二編分論・第六章・第三節「崔融『珠英學士集』及其「以官班爲次」的編集體例」参照。

(11) 注10傳璇琮書『珠英集』(徐俊編撰所收の卷五の二種の寫本殘卷から例示しよう。▽通事舍人・吳興・沈佺期。

▽前通事舍人・李適。▽左補闕・清河・崔湜。▽右補闕・彭城・劉知幾。▽右臺殿中侍御史內供奉・瑯琊・王無競卷四(斯二七一七)。更に一例を挙げよう。▽蒲州安邑縣令・宋國・喬備。▽太子文學・河南・元希聲。▽司禮寺博士・房元陽。▽洛陽縣尉・楊齊愬。▽恭陵丞・胡皓(卷五(伯三七七一))。これら二例とも記名は、官職・鄉里・姓名という順番で記されている。官職から相當する品階を見ると、前者では、通事舍人が正七品下、左・右補闕が從七品上、殿中侍御史が從七品上に當たる、後者では、蒲州安邑縣令が正六品下、太子文學が正六品下、司禮寺博士が從七品上、洛陽縣尉が從八品下に當たる。兩者ともに品階の高い順に配列されている。つまり當書は卷一から卷五にかけて官位の高い順に配列されていたのである。

(12) 盧燕新・楊明剛「初唐編纂的詩歌總集考論」(『山西大學學報』『哲學社會學版』第34卷・第6期、二〇一一年)、注10盧燕新書参照。

(13) 概説と本文・注釋は、村田正博・栗木順子『翰林學士集新撰類林抄』(和泉書院、一九九二年)、傳璇琮書、藏中進・藏中しのぶ・福田俊昭『翰林學士集』注釋(大東文化大學東洋研究所、二〇〇六年)、專論として盧燕新書・第六章第二節『翰林學士集』題名職官考辨(など)参照。成立年代に關しては、前記の盧燕新書の中では永徽三年(六

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考(半谷)

五二)前後の成立、という。

(14) 矢島玄亮『日本國見在書目錄——集證と研究——』(汲古書院、一九八四年)、『日本國見在書目錄』(名著刊行會、一九九六年)。特に孫孟『日本國見在書目錄詳考』(上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、二〇〇九年)は、當書の著録する各書に關し中國における著録・書名の校訂・存佚・著者・考證の項目を掲げ、日中の最新の研究成果を踏まえる勞作。

太田晶二郎氏は、成立年代に關して「寛平三年正月基經薨去の以前に在る」(『日本の曆に於ける「蜜」表記の上限』《太田晶二郎著作集 第一冊》、吉川弘文館、一九九一年)と述べ、『日本國見在書目錄』が「冷泉院が燒けて典籍が多く減んだことが原因で編纂された」という通説は安井息軒の『書現在書目後』に付した臆測の言辭に基づく推測に過ぎないと正し(『日本漢籍史札記』(同)、さらにこの書名の意味は「本國ノ中國(その直接のところは、主として隋書經籍志の記載)ニ對比サレル意味ニ於テ、本邦日本ニ將來サレテ實際ニ存在シテイル漢籍」の目錄、と論定する(『日本國見在書目錄 解題』《同第四冊》、同、一九九二年)。拙稿「文華秀麗集の位相」(『中國詩文論叢』第十七集、一九九八年)参照。

(16) 注6瀧川論文。

(17) 總集全體の體例概要は、現時點で從來の研究を繼承・進展させた次の四點に依る。六朝は傳剛『昭明文選』研究』

中國詩文論叢 第三十五集

上編・第一章・第二節「漢魏六朝著書、編集體例述論」(中國社會科學出版社、二〇〇〇年、以下この書は書名を「傳剛書」と略稱する)、唐代は盧燕新・楊明剛「初唐編纂的詩歌總集考論」(《山西大學學報「哲學社會學版」》第34卷・第6期、二〇一一年)、盧燕新書・第一編總論・第四章・第一節「唐人選編詩文總集的體例與選本的體例批評」、および中澤希男「唐人選唐詩考」(《群馬大學教育學部紀要「人文・社會科學」》22・4、一九七三年)参照。

(18) 『古今詩苑英華』の體例については、傳剛書・下編・第一章・第二節「文選」與「古今詩苑英華」、『文章英華』的關係に「即此書(古今詩苑英華)是于篇題下列有作者小傳、說明其時代・爵里・才行等。」「古今詩苑英華」收錄存者の體例」とある。

(19) 傳剛書三四・三五頁に「以類相從」本是類書的工作方法。・・・類書の目的在于便利讀者、通過分類查探、易于用事用典、真正是用功少而所收多。魏晉以後、類書的迅速流行、自然與這一種便利有關、而「以類相從」的體例也影響到總集的編纂。」とある。

(20) 魏晉南北朝の詩文總集で現存するものは『文選』『玉臺新詠』だけである。岡村繁『文選の研究』第一章・一『文選』編纂以前の先驅的詩文總集と詩文選集(岩波書店、一九九九年)には、主に『隋書』『經籍志』『總集』序に基づいて「魏晉六朝時代を通じて、この間に次々と編纂された大小さまざまな總集・選集は、かの西晉の摯虞(？)(三二一)が初

めて『文章流別集』三十卷を公にして以來、時代による文體分類の精粗はともかく、傳統的に文體別の編排に従うことを原則とし、作者別の編制にはなっていなかったようである。」と述べる。

(21) 興膳宏『玉臺新詠成立考』(『東方學』第六十三輯、一九八二年)、『中國の文學理論』(筑摩書房、一九八八年、再收)参照。

(22) 各總集體例の確認に際して参考にした著書・論文は以下の通り。傳璇琮書、傳剛書、盧燕新書をはじめ、注17中澤論文、吳企明「唐人選唐詩・流傳、散逸考」(『唐音質疑錄』(上海古籍出版社、一九八六年)、周勳初主編『唐詩大辭典』(江蘇古籍出版社、一九九〇年)、陳尚君「唐人編選詩歌總集敘錄」(『唐代文學叢考』、中國社會科學出版社、一九九七年)、注20岡村繁『文選の研究』、陶敏・李一飛『隋唐五代文學史料學』(中華書局、二〇〇一年)、賈晉華『唐代集會總集與詩人群研究』(北京大學出版社、二〇〇一年)、孫琴安『唐詩選本提要』(上海書店出版社、二〇〇五年)、注17盧燕新・楊明剛論文など参照。

(23) 注17盧燕新書参照。

(24) 盧燕新書六十頁に「知唐人早期編纂總集最重要的動力源于編纂人繼承唐前文化、謀求盡善盡美地發展唐代詩文文化的立功心態。」とある。

(25) 注17盧燕新・楊明剛論文参照。

(26) 注18参照。『續古今詩苑英華』も集名から『古今詩苑英華』

の體例を踏襲していたと推測。

- (27) 『古今類序詩苑』、盧燕新書四二頁に「古今類序詩苑の編纂受到詩苑英華選舉思想之影響」とある。

- (28) 『古今詩類聚』(『古今詩類』)、盧燕新書四二頁に「該集的特點、由集名推測、應屬以類集詩的通代選詩總集」とある。

- (29) 『文館詞林』、『唐會要』卷三六、修撰の條に「顯慶二年十月二日、許敬宗修文館詞林一千卷、上之。」とある。羅國威『文館詞林校證』(中華書局、二〇〇一年)参照。

- (30) 『續文選』、盧燕新書四〇頁に「受『文選』學的影響、唐人或擬、或續、或由『文選』編選方法推陳出新、其實質、或繼承『文選』及『文選序』的文學思想、或爲學習『文選』的編選方法。類似詩文總集甚多、其中、徐堅等集撰『文府』二十卷、徐安貞等集撰『文府』二十卷、李吉甫集撰『麗則集』五卷、……」とあり、同四〇～四一頁に「『續文選』十三卷、孟利貞集撰。『舊唐書』卷一九〇上、孟利貞傳、……華州華陰人、高宗初、爲沁州刺史、以清介著名。……中宗在東宮、深恨之、受詔與少師許敬宗等撰『瑤山玉彩』五百卷、轉著作郎加弘文館學士、垂拱初卒。」という。

- (31) 『珠英學士集』、傳璇琮書、注12參照。

- (32) 注22賈晉華書「附編・二の(一)」高宗武后時期總集、類書之大量修撰與三大宮廷學士詩人群」參照。また唐代類書に關する專書として唐光榮『唐代類書與文學』(巴蜀書社、二〇〇八年)、『藝文類聚』を中心とした類書の考察として大淵貴之『唐代敕撰類書初探』(研文出版、二〇一四年)な

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考(半谷)

ど參照。

- (33) 『文府』、注30參照。また盧燕新書八五頁に「可視之爲詩文合集。該二集(徐堅・徐安貞二書)乃集賢院諸學士協力所纂、旨續纂昭明太子『文選』」とある。また『新唐書』『藝文志四』總集類、「徐堅文府二十卷」の條に「開元中、詔張說括文選外文章、乃命堅與賀知章・趙冬曦分討、會詔促之、堅乃先集詩賦二韻、爲文府上之。餘不能就而罷。」と注される。

- (34) 『文府』、注30參照。盧燕新書八六頁に「徐安貞等集撰『文府』二十卷、其編纂目的同徐堅等。」とある。

- (35) 『續文選』、注30參照。

- (36) 『擬文選』、注30參照。

- (37) 『搜玉小集』、傳璇琮書九七五頁に「此書所收爲初唐至開元前期詩人、排列次序似先爲應制詩、次爲邊塞歌行・古詩、又次爲閨情懷人之什、……但具體排列上都頗爲混雜、看不出編選意圖和選詩標準……」という。

- (38) 『正聲集』、盧燕新書三七頁「到了唐代、如楊恭仁妾趙方等『宴樂』五卷、孫季良『正聲集』三卷……諸總集編選家的選舉觀、文學觀及其採用的編纂體例、編纂方法等、上溯其源、均可至于摯虞。」とあり、摯虞『文章流別集』の選舉觀・文學觀・編纂體例・編纂方法を採用と述べ、「分門編類」と探るという。大いに疑問である。『大唐新語』卷八「文章」に「劉希夷……孫翌(字季良)撰正聲集、以希夷爲集中之最。由是稍爲時人所稱。」とある。つまりこの『正聲

中國詩文論叢 第三十五集

集」(別に劉元濟編『正聲集』五卷もあった)では劉希夷を壓巻としていた、という。となれば當集は「分門編類」ではなく、「以人爲次」と捉えるべきであろう。

- (39) 『國秀集』、傳璇琮書。盧燕新書二四〇頁に「在唐人編纂總集歷史上、以官班爲次編集、影響最大者、屬芮挺章『國秀集』。『國秀集』分上、中、下卷、著錄詩人、均有職官題名、無職者也以處士、進士等明示。上卷多職官顯達者、中卷多中下層官吏、下卷多沈淪下僚者、每卷之中大體以時間先后排序、該集乃以官班爲次的編纂體例的繼承與發展。」とあるが疑問である。すでに注16中澤論文は「時代順に配列しようとした形跡が窺われる」と指摘し、ここでは中澤氏の見解に従う。

- (40) 『丹陽集』、陳尚君「殷璠『丹陽集』輯考」(『唐代文學論叢』第八輯一九八六年)、傳璇琮書参照。詩人に對する評語は鐘嶸『詩品』の影響か。唐人選唐詩への『詩品』の影響を論じているものに興膳宏「詩品から詩話へ」(『中國文學報』第四十七冊、一九九三年)がある。

- (41) 『河嶽英靈集』、傳璇琮書参照。中澤希男「河嶽英靈集攷」(『群馬大學紀要』第一卷、一九五〇年)は配列をほぼ登第年順とする。詩人に對する評語の記載は『詩品』の影響か。

- (42) 『荊揚挺秀集』、注39陳尚君論文参照。

- (43) 『玉臺後集』、傳璇琮書参照。盧燕新書四三頁に「……以此可窺見是集編纂旨在續徐陵『玉臺新詠』、所選多爲艷體樂府詩、以作者列目、以時間編次、屬通代總集。」と見える。

なお注22陳尚君論文一八七頁に「筆者有此集輯本、据以上提及諸書及『樂府詩集』、『草堂詩箋』等書、考知作者六十餘人、輯得詩九十多首、收入『唐人選唐詩新編』(傳璇琮書)」とある。

- (44) 『篋中集』、傳璇琮書・注22孫琴安書参照。

- (45) 『中興開氣集』、傳璇琮書参照。作者小傳・評語を付すのは『河嶽英靈集』の影響らしい。

- (46) 『麗則集』、『郡齋讀書志』卷二十、「麗則集五卷」の條に「集文選以後至開元詞人詩、凡三百二十首、分門編類。貞元中、鄭餘慶爲序。」とある。注17中澤論文、盧燕新書・第二編分論・第八章・第二節「李吉甫編纂的詩文總集考論」参照。

- (47) 奉敕撰『御覽詩』、注22中澤論文、傳璇琮書参照。

- (48) 『南薰集』、『郡齋讀書志』卷二十、「南薰集三卷」の條に、右唐竇常集韓翃至皎然三十人、約三百六十篇、凡三卷。其序云、欲勒上・中・下、則近于褒貶、題一・二・三、則有等衰。故以西掖・南宮・外臺爲目、人各係名・係贊。」とある。

- (49) 『極玄集』、傳璇琮書、注22陶敏・李一飛書一〇九頁に「作者名下均有小傳、載其字貫・登第年及官職。……宋抄一卷本亦無作者小傳、益知二卷本中作者小傳乃後人抄撮諸書所加、非原書所有」とあり、原書『極玄集』には作者小傳はなかったと理解する。

- (50) 『又玄集』、傳璇琮書参照。

(51) 注14孫孟書。

(52) 張固也「康顯貞詞苑麗則序考實」(『學術論壇』2009年第3期、二〇〇九年)、同「康顯貞詞苑麗則序釋論」(『北京大學中國古文獻研究中心集刊』9、二〇一〇年)参照。

(53) 盧燕新書・第二編分論・第六章・第三節「崔融『珠英學士集』及其『以官班爲次』的編集體例」四、「以官班爲次」的先學意義」参照。

(54) 小島憲之氏は『國風暗黒時代の文學』上、第二章・三「上代に於ける詩歌の表現」・一「懷風藻をめぐって」(稿書房、一九六八年)のなかで、編纂時に生存する詩人の作品收録に關しては兩説あるが、詩人生存年代を中心に検討して、不採録の説に賛意を示す。妥當であろう。ちなみに盧燕新書・第一編總論・第五章第三節「唐人編纂詩文總集的域外傳播——以朝鮮半島、日本爲重點考察」の條に『懷風藻』、『東人文』、『東文選』選録存者詩文、乃受到唐人總集選舉觀之影響。」(一九七頁)と述べ、編纂時に生存する詩人の作品も收録すると述べ、それを唐代總集の編纂基準の影響というが、従い難い。

(55) 『玉臺新詠』の受容が詩語と抒情の雙方にはっきりと認められる例は管見に依れば敕撰三漢詩集であり、しかも九世紀初頭の嵯峨弘仁期に入っている諸作品である(拙稿『文華秀麗集』艷情「春閨怨」詩に關する比較詩學的考察」(『平安文學の風貌』所收、武藏野書院、二〇〇四年)。

一方、『懷風藻』序文末尾の採詩年代・收載詩數・卷數・作敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考(半谷)

者數、そして書名の由來と書名、及び成書の時期を記述している點に注目したい。これらは『玉臺新詠』序にはなく、『文選』序では採詩年代・卷數・書名の記載のみである。では收載詩數や書名の由來・成書年まで記す序文を探ると、いくつかの唐人選唐詩の序文に至るのである。しかしこれらの總集は年代的に見て直接受容の可能性は考えられない。だがこの『文選』・『玉臺新詠』にはない唐人選唐詩の序文との類似から、初唐末・盛唐の總集編纂の影響という臆測を拂拭できない。

(56) 拙稿「平安朝七言排律詩の生成」(『和漢比較文學』第四十七號、二〇一一年)、同『懷風藻』押韻考」(同第四十九號、二〇一二年)参照。

(57) 注54盧燕新書では、日本の例として『懷風藻』のみを對象とするが、唐代總集の撰詩編纂方法の影響としては、その體例から見て敕撰三漢詩集を例舉すべきであり、全く取り上げられないのは實に遺憾である。

(58) 注56参照。

(59) 小島憲之『文華秀麗集』(日本古典文學大系)「解説」(岩波書店、一九六四年)、松浦友久『文華秀麗集』考」(『漢文學研究』第十號、一九六二年、松浦友久著作選Ⅲ『日本上代漢詩文論考』(研文出版、二〇〇四年、再收)参照。

(60) 注59松浦論文では、成立の上限を弘仁九年(八一八)六月十七日、下限を同八月半ばとする。また仲雄王弘仁十年(八一八)正月の官位昇進に意義を持たせれば上限を同十月はじ

中國詩文論叢 第三十五集

めまで下げることも可能、ともいう。

- (61) 四集の官銜表記に關しては、別稿に來源や六朝・唐代との相違を含め考察したい。後藤昭雄「文徳朝以前と以後」『平安朝漢文學史論考』所收、勉誠出版、二〇一二年)には、『群書類從』卷百三十四『雜言奉和』に所收する嵯峨天皇に奉和した五篇と『翰林學士集』の官銜が「全く一致する」との興味深い指摘がある。

- (62) 官位相當であれば官・位の順の記載が原則『國史大辭典』「位署書」、とすれば合わない例もある。

- (63) 川口久雄『三訂 平安朝日本漢文學史の研究』上(明治書院、一九七五年)附載「修訂詩家書目」四五〜七一頁。

- (64) 『日觀集』、序文「……天慶儲宮、德高監撫、學長詳該。從在藩之時、令狎近之輩、採撫風人墨客律詩。起於承和、泊于延喜。十人入選、廿卷成功。留心異才、分部同類。方爲日觀集、竝取扶桑名也。其所擢用者、相公野篁・大夫良春道・相公江音人・相公橘廣相・大夫都良香・丞相菅道眞・相公善清行・納言紀長谷雄・大夫江千古。只辨時代之先後。不依官爵之高卑。……」(天慶の儲宮、德は監撫より高く、學は詳該に長ず。在藩の時より、狎近の輩をして、風人墨客の律詩を採撫せしむ。承和より起り、延喜に泊ぶ。十人選に入り、廿卷功を成す。心を異才に留め、部を分かち類を同じうす。方に日觀集と爲し、竝びに扶桑の名を取るなり。其の擢用する所の者は、相公野篁・大夫良春道・相公江音人・相公橘廣相・大夫都良香・丞相菅道眞・

- 相公善清行・納言紀長谷雄・大夫江千古なり。只 時代の先後を辨じ、官爵の高卑に依らず。)とある。「起於承和、泊于延喜」は斷代による編纂を示し、したがって編纂時の詩人の收載はない。この點は敕撰三漢詩集と異なる。これは『後撰集』に見られる「當代を重んじない考えからきているであろう」(『増補新版日本文學史 中古』(至文堂、一九七五年、五一頁)という指摘があり、その一例なのか。「分部同類」とは「分門編類」を、「辨時代之先後」とは「以時代相次」を指し、「不依官爵之高卑」とは「以官班爲次」に依る配列を採らないことを言う。

- (65) 『扶桑集』、同題の詩群ではほぼ「以官班爲次」による配列である。編纂時(長徳年間『江談抄』)に生存する詩人の收載に關しては未詳。本文は田坂順子『扶桑集』(權歌書房、一九八五年)を参照した。

- (66) 『本朝麗藻』、同題下の詩群はほぼ官位の尊卑による配列である。しかし同類下の同題の各詩群が時間順に配列されているのは未詳。

- (67) 『本朝文粹』、體で分け、さらに内容で分けている。これは「文選」の影響である。

- (68) 『中右記部類紙背漢詩集』、詩會ごとに作品がまとめられ、同題下ではほぼ官位の尊卑に依る配列。本文は『圖書寮叢刊 平安鎌倉未刊詩集』(明治書院、一九七二年)を参照した。

- (69) 『本朝無題詩』は類題で分ける。さらに同類題下で同題の

作品群は官位の高低による配列なのかは未詳。

(70) 『集韻律詩』は、『類聚國史』(巻第四百十七「撰書」)・

『本朝書籍目録』(群書類従本)「詩家」に『集韻律詩』と記載がある。是善の『東宮切韻』の編纂から考えるといくつか本書の内容を推察できる。『東宮切韻』が編纂された理由は、唐では詩賦の押韻は『切韻』に依るのが通例であるが、敕撰三漢詩集の押韻實態をみると、切韻と六朝韻書の混用であった(拙稿「敕撰三漢詩集押韻考」『國文學研究』第五百五十八集、二〇〇九年)参照。『東宮切韻』が編纂された當時もまだ混用していたのであろう。そこで唐代の押韻に倣うべく企圖し編纂したのが韻書『東宮切韻』であり、それを詩賦の例に確認でき、作詩賦に利便を圖ったのが『集韻律詩』ではなからうか。體例はおそらく『切韻』のそれぞれの韻目に屬する韻字を押韻する今體詩を集めて列舉したものであろう。したがってこの總集は「分門編類」の一つ、と考えられよう。さらに是善の撰書には『銀勝翰律』がある。『本朝書籍目録』(群書類従本)「詩家」に著録する『銀勝朝翰』十卷、菅原是善撰」とある書に同じ。その前後に『經國集』廿卷、『菅家三代集』廿八卷を著録する。したがって『銀勝翰律』十卷も詩、あるいは詩文の總集である。集名「銀勝」とは「銀榜」、東宮の唐名(平安朝漢文學總索引)付「官職唐名一覽」という。これは皇太子及び周邊の人々の作品を集めた總集であらう。ただし、體例を推定する手が見つかからない。

敕撰三漢詩集、及び『懷風藻』體例考(半谷)

(71) 『韻花集』注62川口書には「中右記」を引用して「中御

門宗忠撰。以扶桑集・本朝麗藻詩・切續韻書。保延元年(一一三五)焼上。」と記すが、「續」は「韻」の形訛、あるいは衍字であらう。詩集と韻書をもとに編纂されたと推定できるので、この書の體例は是善『集韻律詩』と類似していいのではないか。

(72) 例えば傳剛書・第一章・第一節「漢魏六朝著書編集動因

考」には「別集的大量湧現、促成了總集編撰的歷史要求」(二二頁)と述べ、「隋書」「經籍志」に見える「總集」の解説を引いて、作品の大量發生と別集の増加があつて閱覽が困難となり、總集が誕生する、という。當然別集だけではなく總集の集積も新たな總集の編纂を促す。『文選』編纂を考究した清水凱夫『新文選學』第二章『文選』編纂の實態」(研文出版、一九九九年)も参照。

(73) 各五首への注釋は小島憲之『國風暗黒時代の文學』中(下)

I(塙書房、一九八五年)第四章・一・「弘仁期の詩(一)、拙稿「難言奉和」「落花詞」考」(『有斗・柏陵論究』第17號、二〇〇二年)。

(74) 注61後藤論文参照。

(75) 例えば『文選』編纂における劉孝綽の存在。注72清水凱夫書・注20岡村繁書参照。

(76) 「臣之此撰、非臣獨斷。與：菅原朝臣清公……勇山連文繼等、再三詳議。」(『凌雲集』序)、「臣謹與……菅原朝臣清公……勇山連文繼……滋野宿祢貞主……桑原公腹赤

中國詩文論叢 第三十五集

等、各相平論、甄定取捨。」(『文華秀麗集』序)、「謹與……南淵朝臣弘貞……菅原清公……安野宿祢文繼……安部朝臣吉人等、詳舉甄收、無所隱祕。」(『經國集』序)參照。

- (77) 三木雅博『『文華秀麗集』『經國集』の「雜詠」部についての覺書』(『日本古代の「和」と「漢」所收、勉強出版、二〇一五年)一四三頁。ただし小島憲之氏に同じく「以人爲次」による總集を「作者中心の唐人選唐詩式の編集」と述べるが、本稿で指摘した通り唐代でも「分門編類」の總集の方が多くを占め、その見解は誤解である。また『經國集』が「以人爲次、再以官班爲次」の體例を採る點に關して、同一四二頁に「これは便利のために後續の經國集の方法にそのまま採用される」と述べるが、本稿に論じたようにこの體例の持つ本質的な意味を捉えておらず、總集編纂に關して誤解を與え従い難い。また、同論文の「注5」には『日觀集』序の「分部同類」を「部を同類に分つ」と訓讀する意味が通じない。「分部」も「同類」も同意(互文同義)なので「部を分かち類を同じうす」と訓讀すべきである。

(78) 注2拙稿參照。

(79) 注2拙稿參照。